上波夫教授古稀記念論文集歴史篇』という專らジュシェンを問題にした論文さえある。鄭氏は(1)ではいとも簡單にジュシェンを奴隷とし（六頁）、アハと「意義相同じく互用するもの」（八頁）とみているが、普通アハを奴隷、ジュシェンを隷民と譯している我が國の考え方とは甚だ異る。(2)では『武皇帝實錄』に民とあるのを『滿文老檔』ではジュシェンとしていると述べている（二九頁）にすぎないので、その眞意を測りかねるが、いずれにしてもなお檢討する餘地が大いにあると思う。

それにつけても我が國には右記の諸氏の外に、滿洲族の社會や經濟などに關する研究が戰前からたくさんある。いまめぼしい單行本だけを擧げてみても、周藤吉之氏の『清代滿洲土地政策の研究』や『清代東アジア史研究』、三田村泰助氏の『清朝前史の研究』、安部健夫氏の『清代史の研究』などの大著がある。そうした研究成果が中國の學界で殆ど知られていないのは、まことに殘念なことと言わねばならない。この二、三年の閒、中國では新進の研究者による清初史關係の論文がしきりに學會誌を賑わしているし、新しい滿文檔案なども發見されているようである。最近、日中兩國閒の學術交流は頓に盛んになりつつあるが、今後ますます交流が深まり、雙方の清初史の研究が一段と進展することを切望してやまないものである。

一九八〇年六月　北京　中華書局　A5版　四六六頁

John K. Fairbank and Liu Kwang-Ching (eds.), *The Cambridge History of China, Volume 11: Late Ch'ing (1800—1911), Part 2.*

ヨシュア・A・フォーゲル

『ケンブリッジ中國史』の第一一卷は、最終的に一五卷となる豫定の概括的な中國史の第三回配本である。第一回配本は一九七八年に出た第一〇卷（『東洋史研究』三八—三の書評參照）で、一九七九年には隋唐代を扱った第三卷が續いて出た。三冊目が今回世に出たのだが、すでに一〇年以上もかかっているこの巨大なプロジェクトの全體を見られるのは、ずっと先のことである。この分では、全卷が揃ってみられるようになったときには、新しい研究によって、それらの改訂と『〝新〟ケンブリッジ中國史』の編纂事業の開始とが餘儀なくされるにちがいない。

第一一卷は第一〇卷の姉妹篇として編まれている。一八〇〇年から一九一一年に及ぶ樣々な主題があるけれども、年代的には、第一〇卷の內容の多くは第一一卷よりも早い時期を扱っている。さらに辛亥革命で日本が果たした役割について論ぜられている第六章を除いては、本卷の三分の一は現在までの英米兩國における中國學の得意な分野である對外關係に費されている。第一一卷は第一〇卷よりもはるかに廣く四箇國からなる國際的學者陣を揃えているが、こうした大部な概說でもなお、何か重要なものが缺けていると感じられ

るのである。

第一一巻の内容は、次の通りである。

編集者の序
地圖リスト
表リスト
第一一巻への序言
第一章　清末の經濟動向―一八七〇～一九一一―
アルバート・フェアワーカー（ミシガン大學）
農業／手工業／近代工業／國内外の商業／政府と經濟
第二章　清末の對外關係―一八六六～一九〇五―
イマヌエル・C・Y・スー（カリフォルニア大學サンタ・バーバラ校）
變わりつつある關係／對外關係―一八六六～七五―／帝國主義の邊境及び屬國侵略／日本の朝鮮侵略／〝中國分割〟の脅威／義和團の亂／日英同盟と日露戰爭の影響
第三章　中國の國際觀の變化―一八四〇～九五―
郝延平（テネシー大學）
王爾敏（香港中文大學）
傳統的な對外關係觀／最初の對應と停滯／西洋列強の衝擊／對外政策觀の兩面性／中國の國際關係觀の連續と變化
第四章　軍事的挑戰　西北中國と沿岸地域
劉廣京（カリフォルニア大學デイヴィス校）
リチャード・スミス（ライス大學）
太平天国後の清軍／回民起義とその國際的關係／陝西・甘粛における清朝の勝利／新疆再征服／李鴻章と沿岸防衛／清佛戰爭とその餘波／災難　日清戰爭
第五章　思想の變化と改革運動―一八九〇～九八―
チャン・ハオ（オハイオ州立大學）
背景：ウェスタン・インパクト／康有爲と新思想の發酵／改革運動／湖南における改革／一八九八年の挫折／改革時代の遺産
第六章　日本と辛亥革命
マリウス・ジャンセン（プリンストン大學）
日本への警告　中國開國／中國思想上の明治日本／日本の中國人學生／民族主義とその反響／翻譯物の影響／日本と中國の革命家
第七章　政治改革と制度改革―一九〇一～一一―
市古宙三（東洋文庫）
光緒帝の改革令／教育改革／軍制改革／立憲政治の準備／財政の改革とその中央集權化／他の改革案／清末改革の特徴
第八章　一九一一年以前の政府・商人・產業
ウェリントン・K・K・チャン（オクシデンタル大學）
商人と近代企業：稅額査定／近代工業への官の援助／私企業運動／北京と地方：主導權爭い／官僚資本家の出現
第九章　共和主義者の革命運動
マイケル・ギャスター（ラトガーズ大學）
初期の連合：一九〇五年以前の革命運動／同盟會―一九〇五～八―／清朝の破綻―一九〇八～一二―／同盟會の出現／共和制の誕生

第一〇章　社會變化の潮流

マリアンヌ・バスティ＝ブリュジエール
（パリ國立科學研究センター）

特權階級／一般民衆／下層勞働者の成長／社會變化の原動力

文獻解題

參照書目

語彙索引

以上の章題から、『ケンブリッジ中國史』はまだその性格の何たるかを決定していないことがわかる。本書は、中國史の包括的かつ敍述的な概論たらんとしているのか。特定時代の中國史の問題について説明や分析を行なった論文集たらんとしているのか。あるいは（第一〇卷のように）その兩者たらんとしているのか。いままでその問いに對する解答は讀者に委ねられているが、その問題を避けることは何の解決にもならないのである。

第一一卷のいくつかの論文は、純粹に敍述のスタイルをとっている。イマニエル・スー氏の清末の對外關係に關する第二章は一八六六年から一九〇五年までのすべての主要な事件・人間・問題を要約したものである。氏が結論部分を設けていないことから、この論文の基調がわかる。スー氏は膨大な量の史料を整理して、教科書流にこの期間に起きた事件を回顧している。このことは、もし我々がその問題についてほとんど知らなかったならば、第一〇卷でジョゼフ＝フレッチャー氏がなしとげた偉業に匹敵する重要な業績となったであろう。しかし、スー氏自身は早くから下準備に骨を折ってきたけれども、氏の用いた素材は、ありふれたものばかりである。そのうえ、研究對象としている時代の中國人登場人物に對しては、あたかも彼ら自身がそうした結果を招いたと言わんばかりに、ほとんど同情を示していない。その結果、清議派は「無責任な狂信的愛國主義を唱えるもの」として、非魅力的に描かれている。それは、スー氏獨特の「清議」解釋である。また、氏は義和團の排外主義の原因をいくつか述べているにもかかわらず、義和團が主として非理性的なものによって動いていたように描いている。

義和團運動は、反動的な滿洲宮廷、保守官僚並びに鄕紳、無學で迷信深い民衆等の諸勢力が結びついて展開した。それは、帝國主義に對する反感と怒りとが非理性的な形で爆發したものであった。（一二九頁）

マイケル・ギャスター氏が執筆した辛亥革命についての第九章もまた、第一に要約であるといえるが、そこには從來ドグマチックな學者以外には解答できなかった革命をめぐる多くの難問が提出されている。最近の中國及び西洋における研究に基いて、ギャスター氏は多樣な革命集團の社會的・政治的起源を追跡している。革命イデオロギーは、樣々な社會背景と西洋に對する相反した見方のために、最初から矛盾をはらんでいた、と氏は考えている。ギャスター氏は清末の革命派と改革派との論爭を論じて、洞察鋭く次の點を指摘している。

中國におけるより重要な分裂は、本質的な變化を積極的に推進していた人々とそうでない人々との間のものである。この點においては、革命派も改革派も同樣に貢獻している。かれらの著述により、人々は根本的變化をますます求めるようになったからである。一九一〇年以後、清朝がついにそうした要求を滿足

させることができないという無能ぶりをさらけ出すと、革命と共和主義の思想は、ますます多くの人々に受け容れられ始めた。（四九九頁）

氏が述べている最も興味深いことの一つは、共進會・文學社・中部同盟會の祕密活動とこの活動全體における新軍の中心的意義である。ギャスター氏は、一九一一年一〇月一〇日まで筆を進めると、次のように聲を大にしてのべている。

我々は辛亥革命史の中で革命派をのみ込んだようにみえる時點に到達した。（五二七頁）

それから後の話はよく知られているものであるが、「何が起きたのか」という問題は、依然として歷史家に殘されている。ギャスター氏は鄉紳について、新興で、挫折した經驗があり、それ故革新的で、民族運動において地方の世論を熱心に動かし、必要な場合にはすすんで革命を起こそうとした、という命題に從っている。鄉紳は傳統的役割は果すが、もはや科擧制度から離れて國民的階級に變身しつつあり、自己の利益を保全するために清朝を倒して共和制を樹立する覺悟ができていた。辛亥革命について議論はなお續くであろうが、少なくともギャスター氏は自分の立場を保持している。

劉、スミス兩氏が執筆した第四章は、年代的には第一〇卷でフィリップ・クーン氏が執筆した太平天国に關する論說につづいている。この章は內容が豐富で熟讀に値するが、殘念なことに分析が不足している。しかしその內容は、最近の西洋や中國における研究と史料とに確固として基いている。この章の議論の多くは、大部分の讀者にとって目新しいものであろう。このことは特に、新疆と西北中國における反亂、及び清朝による再征服に關して豐富に史料が引用されていることにおいてあてはまるであろう。著者は回民起義を重視して、如何なる社會的要因（敷延して宗教的要因）が回民を反亂に導いたのか、を理解しようとし、さらに左宗棠その他の人々が如何に鎭壓したか、を描いている。この章で特にみごとに論ぜられているように思われるもう一つの部分は、〝臺灣における劉銘傳〟である。劉、スミス兩氏はこの論議の的になっている人物と一八八五年から九一年までの臺灣におけるかれの改革への努力とを公平に分析している。兩氏は劉銘傳に對して高い評價を與えている。

劉巡撫は良心的であり革新的であった。（二六五頁）

この章は「最初から最後まで（中國にとり）全くの災難であった」日清戰爭で終っている。

市古宙三氏が執筆した第七章は、歷史敍述と分析的解釋とを如何に結びつけることができるかを示すモデルである。その論調は淡々としているが、たんねんに讀めば、以前には西洋の文獻で論ぜられることのなかった、多くの價値ある內容を發見するであろう。市古氏は清末一〇年間の改革を四つの表題に分類した。すなわち、教育改革・政治改革・軍事改革・財政改革である。氏は各々について、清朝は何を改革しようとしたか、如何に問題のある分野に立ち向かったか、及び改革の相對的な成功が生んだ問題、を說明している。たとえば、清朝は中國人學生の日本留學を許すことにより、かれらに活動の基盤を與えたばかりか、日本の急進主義者と接觸することをも許した。清朝は、かれらの在日臣民を統制しようとしたが、そのことは排滿思想をかつてなく高揚させた。同樣に、清朝は新軍を創設することにより、自身を滅ぼすこととなった。最も關心をよぶ市古氏の論點は、一九〇六年に始まる〝立憲制の準備〟に關するも

のである。氏は北京の清朝政府が權力の中央集權化を圖るとともに、あちこちで譲歩を餘儀なくされ諮議局と資政院の設立を許したという複雑な光景を描いている。郷紳は諮議局を獨占し、清朝は資政院を支配しようとした。市古氏によればそれは保守的な合意であった。

要するに、清末のこの地方自治は、保守的な清朝政府と、同様に保守的な地方郷紳とが、相互の利益を求めて互いに協力することにより、變りつつある世界において、自分たちの政治權力を保持しようとした試みであった。（四〇二頁）

さらに清朝が郷紳に壓力を加えたため、諮議局は協定を放棄して革命に參加した。市古氏の分析的結論は、滿洲人による改革が自己矛盾であり、利己的なものであったことを示している。しかしまた氏は、地方郷紳が改革を支持したのは自己の利益を圖ったからにすぎないことを明らかにしている。改革により、郷紳は科擧制度消滅の餘波を受けながらも、地方の支配權を保持する手段を得た。

要するに、たとえ清末十年間を通じるものでないとしても、最後の五、六年間の改革案は、滿洲人支配者・中國人地方官・郷紳が自身の權力を保ち、あるいはそれを擴大しようとさえした試みであると見なすことができる。これらの要素はしばしば食い違いを生んだ。結局、改革は清朝の沒落を導いたのである。（四一五頁）

本卷の三本の論文は思想史を論じているが、それは三つの全く異なる視點によっている。この中で最も興味深いのは、辛亥革命に至る數年間の中國の改革と革命とに果たした日本の役割についてマリウス・ジャンセン氏が書いた第六章である。ジャンセン氏ははじめに基本的前提を述べている。「中國と日本の近代化は內部で密接に關係しあっていた」（三三九頁）という點である。それからあとでは、アヘン戰爭から辛亥革命まで中國と日本の文化的・政治的相互作用について、西洋の學者が誰も描くことのできないくらい大きくかつ魅力的な描寫を提供してくれる。中國人改革者たちに影響を與えた日本の近代化の經驗と、關心ある日本人に影響を與えた、西洋支配下にある中國の運命および改革への努力とのもつ重要性に、氏は注目している。また一方で、この分野における實藤惠秀氏の先驅的業績に多く依據しながら、日本の學校における中國人學生の經驗が中國民族主義の育成に寄與したことに多大な關心を寄せている。またジャンセン氏は、自身の以前の研究に加えて、幾分詳細に大陸浪人、東亞同文會、同じ様な志を持った東アジアの〝冒險者〟などの行動を論じている。さらにこのすべてを背景として、興中會の設立、孫文の初期の革命活動、宮崎滔天との接觸を論じている。ジャンセン氏の結論は日中關係の變質を豫言している。

もちろん日本の影響は決定的なものではないが、中國人が經驗していた、より大きな變化の潮流を促した。中國人指導者達が日本と接觸して受けた衝擊の大きさを測るのは難かしい。しかしある一部の日本人の生涯において中國人との接觸が最も重大な經驗であったことは容易に認められる。宮崎及びその友人は大陸浪人と呼ばれるが、彼らの全生涯はそのようなものとして知られていた。彼らにとって、新しい東アジア建設への戰いは、個人的・民族的領域を越えた大義であった。しかしながら、民族意識の潮流の高揚する中で、中國人・日本人兩者にとり、國際的に連帶することが困難であることが明らかとなった。

（三七四頁）

郝・王兩氏による第三章は特異な論文である。その原因はおそらく、それが中國語で書かれるべきであって英語で書かれるべきでなかったかのように見える點にある。それは實質的に西洋の中國學界には知られていない、原典に忠實な考證學的性格のものである。著者は、中國の知識人たちが西洋を理解しようとする際に用いた語を、極めて嚴密に見ている。また兩氏は、經世學派とその政治・思想・軍事・制度について卓越した梗概を書いている。この論説では、結論よりも原典分析の方がはるかに重要である。例えば次のようなものである。

一八四〇年から六〇年の間に粗末な西洋研究が開始されはしたものの、中國人の國際觀は、誤解と知的・制度的停滯とによって制約を受けていた。中國は國際關係を考慮にいれなかったために、中華帝國をゆるがすさらに強烈な衝撃を受けるまで、國家規模の危機感を持たなかった。近代軍備を求めるうえで、アヘン戰爭に續く二〇年間を空費したというのが、その僞らぬ結果である。（一五五―六頁）

郝・王兩氏は、十九世紀末における〝變化〟や〝機會〟というような、我々があたりまえと考えてきた概念を、傳統的中國思想のより大きな流れの中に位置づけるという注目すべき仕事をした。同様に兩氏は、ほとんど同じ様な災難に直面した際に、様々な種類の中國人士大夫が好戰的な反西洋的態度を保持したという點について、魅力的な説明を行なっている。兩氏は清議派、倭仁その他のような人々を重視する。これは、十九世紀中葉から末にかけての一般的な思潮は革命的であったという、廣く流布している誤まった認識を是正する上で、妥當なものであろう。著者はまた、初期の中國民族意識の背景を、原典に基いてすぐれた形で示してくれる。すなわち、中華思想の沒落、中國の政治・經濟面における民族主義（鄭觀應の著作を中心として）及び國家主權の觀念の發展などである。この論文は、『ケンブリッジ中國史』第一〇巻に最も興味深い貢獻をしたマン・ジョーンズ氏とフィリップ・クーン氏の論文から多くの問題をとりあげている。

チャン・ハオ氏の變法運動に關する第五章は、第一一巻で三番目の思想史の論文である。ここに出されている王韜・康有爲・梁啓超その他についての史料の多くは新しいものではない。その多くはチャン氏自身の梁啓超研究によっている。加えて、チャン氏は陳腐な決まり文句を多く並べているが、それらはより複雜な言葉で單に言い換えただけのものである。

これは……清末改革運動の意義深い新たな出發の先驅となった。從來、改革思想は傳統的團體が合法的であるとの假定と、傳統的な政治秩序の枠組の中で改革を十分實行し得るという前提とに基いていた。今やその合法性が問われ、別の基礎の上に政體を組織する可能性が考慮された。當時の言葉では、西學が技術上の知識のみならず政治上の知識の源となった。（二八一頁）

しかしながら、改革運動そのもの、湖南における改革の先驅者と保守反動（この論文の最良の部分である）、最後に一八九八年のつかのまの勝利と破局についての描寫と評價は、きわめて興味深いものである。これらの部分には多くの事實が詰め込まれており、チャン氏は清末改革運動をめぐる最も重要な鬪爭と緊張とをうまく描いている。チャン氏は自身の他の研究とは異なり、日本の明治維新が

中國の改革者の手本であったことを示した。また康有爲はもはや權力感覺のない孤立した理想主義者として現われるのではなく、今やなされねばならない改革への努力の巨大さと、彼がつぶさなければならないすべての官僚の存在とを明確に意識している人物として現われている。

概して康有爲の戰略は、宮廷と官僚制全體から權力を取り上げて、皇帝及び改革顧問の手に全權力を集中させることであった。實際上の目的にもかかわらず、それは清朝官僚體制全體に對する宣戰布告となった。（三二三頁）

と言うのである。チャン氏はそのすぐれた結論において、改革運動がその後十年間の新しいエリートに殘した遺產を次のように提示している。

このすべての社會・國家・文化上の傳統との關係においては、改革時代には舊士大夫とは著しく異なる新しい社會階層が見られた。彼らは新しい思潮・新しい制度や芽を出した世論とともに登場してきて、改革期の重要な遺產をつくった。（三三八頁）

殘りの三論文は、すべて經濟史もしくは社會經濟史に關するものである。アルバート・フェアワーカー氏の〝經濟動向〟についての第一章は、清帝國末期の歷史に有益なものを加えたが、殘念なことに、氏が筆を起こした一八七〇年に先立つ數十年間の背景を說明する章が、『ケンブリッジ中國史』第一〇卷にはないのである。この論文は嚴密に統計を用い、農業・手工業・工業・商業及び經濟面における政府の役割などについて、幅廣い事象をカバーしている。但し、結論の多くは古くさいものである。例えば、

中央政府は觀念的にも政治的にも、近代企業が存續するためには不可缺の法的制度・經濟制度・商業制度の大枠を確立することも保證することもできなかった。（三九頁）

經濟資源は制限されてはいたが、傳統的な體制下では手つかずのままであって、この體制を破壞できるのは根本的な政治變動だけであった。（四〇頁）

という具合である。さらにフェアワーカー氏はこの古い問題に對する新しい回答を求める際、清末における中國人の商業活動が、本質的には「前近代的」な性格のものであると共に、原初的な「近代性」をも有していたということについて、興味深い見通しを述べている。

しかし實際は、傳統的技術の束縛を受けながらも、清末の中國は複雜で商業化された「先進的」な經濟狀態にあった。（五八頁）

ウェリントン・チャン氏執筆の第八章は、フェアワーカー氏の章と重複するが、それは歡迎すべき重複である。ウェリントン氏は、清末に儒敎の價値體系の範圍內で商人の果たした役割の變化と社會的地位の向上とを詳細に見ている。氏は官督商辦から官商合辦まで種々の形態の、商業への國家介入や、官僚の商業活動への直接介入を考察している。また氏は私企業の興隆と、特に地方鐵道建設のような經濟面における民族主義の出現との連環という問題を論じている。ウェリントン氏は最後に、周學熙・張謇の地方における活動を述べて、清末の新しいグループ――官僚資本家――を評價し、深く掘り下げた敍述を行なっている。要するに氏は、國家の利益と國家の商工業への介入とを、儒敎官僚の經濟活動をイデオロギー上合法化したものとみなしているが、同時に、

中國の官僚は公共の利益と自己の利益とを同一視したため、統

制をやめることを拒み、産業經營にさらに強く介入するようにさえなった。（四六〇頁）

このことは、誕生して間もない中國近代産業に重苦しい影響を與えた。その結果、不景氣に加えて、中央政府と地方の省とが爭うようになった。一九一一年に民營鐵道と國家統制の問題をめぐって清朝に對する鄕紳の反感が爆發することになったのは、單なる偶然ではなかった。

最後にマリアンヌ・バスティ=ブリュジエール氏の野心的な第一〇章がある。それは、第一二卷と一三卷で論ぜられるであろう民國期の急速な變化の舞臺を準備するものであろう。この論文のテーマは最初から現われている。

民衆反亂が彈壓されてから清朝が滅びるまでの四十年間は、中國の社會秩序の全體的な大變動期ではなく、むしろ中國社會内における變質の時代であった。（五三五頁）

という點である。次いで中國人エリートの構成の中の樣々な社會變化と新しい職業集團の勃興とを詳細に敍述している。彼女はまた、新しい制度（近代的銀行・近代的學校）の出現や、清末の社會變化においてそれらが果たした役割についてもかなり多くの紙面を割いている。一般大衆について述べられているところは幾分少ない。彼女が詳細に分析した主要な新集團は工業勞働者であり、そこでは彼らが早くから急速に階級意識を發達させたと指摘している。バスティ=ブリュジエール氏は、清末中國の沒落狀態を西洋のせいであると非難することも、その問題についてのマルクス主義者の硬直した說を引用することも拒んでいる。むしろ彼女は、「農業狀態の漸進的惡化と、特に地主小作關係の中に、帝國時代末の中國社會を搖すぶった變化」（五九一頁）を見ている。中國人反亂者の、自分達の沒落狀態に對する反應は、しばしば無意識に、經濟問題を政治問題に變えることであった。不況時代には、政治權力の所在地が當然民衆の攻擊目標となった。二〇世紀初頭、祕密結社がもはや中心的な政治勢力でなくなると、廣範な大衆の排滿運動が發展した。辛亥革命は長く廣い道の一つの道標にすぎない、というわけである。

以上、一つ一つ見れば、本卷の一〇章すべては、何らかの點で賞讚に値する。その中のあるものは、私が指摘したように特別な價値を持っている。しかし評者にとって特にいらだたしいのは、第一一卷において概念の統一が明らかに缺如していることである。第一〇卷でも、また第一〇・一一の二卷をとおしてみても、それは同樣である。また、上述の例外を除けば、本卷は依然として主に上から見下した事件史であるが、それは（西洋でも日本でも）最近の研究が避けようとしてきたことそのものである。この點において、第一一卷の大部分は出版された時點では時代遲れとなっていた。英米の中國學は、過去二世代にわたって一體何を得たのだろうか。第一一卷のうち最も原典に忠實な論文が、今なお中國人・中國系アメリカ人・日本人によって書かれているのはなぜだろうか。こうした點から見ておそらく、『ケンブリッジ中國史』の執筆に、ほとんど、あるいは全く參加していない若い世代の中國學者たちにとって、最も重要な目標は日本語の習得であろう。

Cambridge: Cambridge University Press, 1980, 23 cm, XX+754 pp.